

7章

子どもの攻撃性に対する創造的な対応

—教育領域におけるドラマセラピーの可能性—

尾上 明代
(立命館大学)

はじめに

ドラマセラピーは、「ドラマ・演劇のプロセスと結果を系統的、また意図的に用いて、症状を緩和する治療や、感情的・身体的な統合促進、また個人の成長を達成させようというもの」である(米国ドラマセラピー学会の定義)。何故、「架空」のドラマで演じることで「癒される」のだろうか。それは、設定が架空であっても、そこに表出されている「感情」は「本物」だからである。むしろ「架空」の空間だからこそ、「現実」の中で直接、表出・表現できないものを安全に外在化させることが可能となるのだ。パラドックスのようだが、これがドラマセラピーの基本的で重要なセオリーであり、魅力でもある。

私はこれまで教育・臨床・企業などさまざまな場面で実践してきたが、本稿では、小学校で行なった多くのセッションの中から、一事例を挙げて、今後の教育領域におけるドラマセラピーの可能性を提示したい。言うまでもなく、子どもは大人より想像力・創造力が豊かである。今までの私自身の経験からも、大人よりずっと簡単に早くドラマの世界に入り込み、癒されることができると感じている。

私自身が相手役をする即興劇の中で、子どもから出てきたどんな感情をも受容すると、彼らは普段出せずに抑えていた感情(特に攻撃的な気持ち、怒り・不満などのネガティブなもの)や他人に面と向かって言えないこと・できないことをすぐに表現してくれる。そのプロセスの中で彼らに満足感・成

功感やカタルシスを与え、結果的に彼らの自尊感情を高め、創造性を引き出すことに貢献できると考えている。シリアスな雰囲気は作らず、あくまで仲間と一緒に楽しいドラマということも大切な点である。一人の子どものネガティブな感情も、決してその一人の子どもだけの孤独なものではない。観客（クラスメート）も我がことのように共有する。それだからこそ、子どもたちはスッキリ癒されるのだろう。「セラピーとしてのドラマこそ、真実が開示され、深いレベルのコミュニケーションと理解が得られ、個人的なことが普遍的なものとなる舞台を提供するのだ（エムナー 2007）」。

現実に持ち帰るドラマと持ち帰ってはいけないドラマ

ドラマセラピーの目的は数多くあるが、小学校で行なう場合は、架空のドラマという安全な枠組みの中で、「現実生活でできないことを子どもたちに実現させてあげること」を念頭においている。「現実生活でできないことを実現する」ドラマには、大別して二つのタイプがある。「現実生活に持ち帰ることで現実生活がより良くなるもの」と、「セッション場面でのみ行なうことに意味があるもの（あるいは現実に持ち帰らせてはいけないもの）」である。

前者は、例えば現実の自分の欠点を変えたい、現実にできないことをできる（言える）自分になりたい、現在の自分でない「役」のレパトリーを広げたい、というような目的で行なう。セッションは現実の「リハーサル」になる。頭の中での単なるイメージトレーニングとは違い、実際に自分の身体を使い、せりふを喋って演じることで具現化させるドラマは、強力な効果をもたらす。一例をあげると、母親への反抗心の表現として不登校気味になっていた児童（彼女は、現実の母親の前で「良い子」を演じ続けていたのだった）。が、ドラマの中で母親役の私に強く反抗することができたことで、家に帰って現実の母親にも自己主張ができるようになった。ドラマのリハーサルで「母親への反抗」が成功したことで、現実生活の「本番」でも成功したのである。その結果、学校に毎日登校するようになった。大変わかりやすい事例だと思う。

後者は、たとえば、現実には絶対できない（できなかつた）ことをドラマで実現することで気分を良くしようとする場合（例えば、もう二度と会えない人に言いたいことを言うなど）や、現実ではやってはいけないことを実行する場合などである。良くないことを子どもがドラマでやろうとしたときは、それが決して現実のリハーサルにならないようにしなければならない。もし行なう場合はドラマの中でしっかり包みこみ、収束させる。

I 君との即興ドラマ

以下は、ある児童が攻撃性を表現した事例である。私が母親役で、放課後、学校から帰ってきて自室にいるわが子に、おやつを持っていく場面を行なった。私と劇をやりたい子どもが、手を挙げて出てきて、二人でクラスメートたちの前で演じる。

[私（母親）がI君の部屋にノックをして入っていくと、窓のところで大きな銃のようなものを持ち、「ズドン！ ズドン！」という音を立て



て発射している様子]。

私： 何してるの!?

I君：ミサイルやってる。

私： こんな危ないもの、どうしたのよ?

I君：買った。

私： ちょっと、ちょっと貸して。(彼から銃を受け取る)。何、これ? 本物!?

I君：本物。今、隣の家と戦って殺してたんだ。

私： 隣の家と? 何で? …何か隣の人、嫌なことでもしたの?

I君：いや。(はっきりと否定してから) やりたかったんだ。

[私はここでミラーイング(同じ動作や気持ちを表現すること)をすることに決める。当初から、観客であるクラスメートたちが笑い続けていて、楽しい遊びという雰囲気があったことにも大いに助けられていたからだ。彼の行為を受容することは、今、目の前の彼自身を私を受容していることになる。またその行為を一緒に行なうことで、彼の感情をさらに増幅・表現させ、楽しい枠組みと私やクラスメートのサポートの中で、彼の攻撃性を昇華させたいということなのである]。

私： あかね。隣の家のおさんって、すごく意地悪な人で、ママも嫌いなのよ。やろう、一緒に!

[窓の内側に椅子をセットし、そこから「ダダダダダ!」と二人で言いながら乱射する。この非日常的な母親の反応と、一緒に行なったその行為に対してI君はととても嬉しそうだ。乱射後、窓の外を指さし、I君に] ちょっと見てきて。

I君：(窓の外を覗いてから母親に振り返って) 皆、死んでるう。

私： やったじゃん。(と言いながら、I君と握手)。

あーびっくりした。…まあとにかく、お菓子でも食べて、落ち着きましょう。(二人は少し照れたように笑いながら、おやつを食べる。観客にも、大いにウケる)。

たとえ遊びの中であっても、親や教師など大人にこのような行為を見られた場合、「隣の人を殺すなんて止めなさい」と言われる可能性が高い。少なくとも一緒に「殺す」ことができる確率は低い。I君はとても満足そうだった。「ドラマ」という枠組みがあるおかげで、このような場面でもクライエントの状況によっては、受容して共感を示すことができるのである。

I君は、その後のセッションでも似たような場面を創って彼なりの攻撃性を表出した。しかし、そのクラスで行なうセッションは3回で終わることになっていたのだから、私は「ドラマの中で許されたことなので、そのような気持ちはセッションの終了とともに収束しなければならないこと」を彼に確認して伝えたいと考えた。そこで即興ドラマ中に、半分母親役、半分素(す)の私として言っているような雰囲気であまり笑いながら彼に話しかけた。

「ねえ、I君。このところ、戦争づいていない？ ママ心配だから、もうやめなさい」。

すると彼は、「うん。」と素直に言い、バケツに水を汲んで床に置く動作をして、その中で「足を洗った」。そして私を見てニッコリしたのだった。私は心打たれ、「そうそう、よしよし！」と、母親役として、また同時にセラピストとしての両方の気分でI君を褒めた。

子どもの創造力はもと素晴らしいのだろう。架空のドラマという安全な枠組みの中で、包み込んであげると、ネガティブな感情を表現して昇華させ、そしてその後、このような文字通りドラマティックな形で、理解したことを私に伝え、収束してくれる。

つまり「安全で受容的なセッティングの中で子どもに自由に演じさせると、その子どもは一番差し迫った問題を満足のいくように、そして健康的に処理することができるのである (Hartley, Frank, and Goldenson 1952)」。

このI君のケースはほんの一例である。今までの経験では、他の子どもたちの攻撃性や暴力性も、ドラマの中で表現させて受容し続けていくプロセスの中で、収束していくことが多かった。(実際の場では、このような即興劇の前に、ドラマに自然に入っていくためのウォームアップと、そこでの感情を収束させるためのクールダウンを丁寧に行なっているが、本稿では、紙幅

の都合で割愛した)。

一般的な劇指導との違い

私が小学校で行なうセッションは、子どもたちの心をひらいて感情を解放し、表現する楽しさを知ってもらったり、またストレスを解消させたりすることを最大の目的としている。ゆえに、上述のように、劇作りの方法や、また観客を意識した発表目的の劇の指導ではない。また劇を手段として何かを教えるわけでもない。劇をするプロセスの中に目的があるので出来栄は全く重要視しない。このように、プロセスを重視しているので、即興を中心に自由にやらせ、また役をふったりもせず自発的にやりたい役のみをやらせるので、子どもの心に負担がかからない。特に私自身が相手役をして、子どもの心を導いていくところが、一般の劇作りや演技指導との最大の違いである。

配役をして発表を目的とした一般劇では、やりたくない役をもらう（言いたくないせりふを言う）やりたい役ができない、何度練習してもうまくできない、などの子どもがいる場合、感情を出せてスッキリするどころか、気分が重たくなったり、時には傷ついてしまうこともあり得る。MacCaslin(1984)も、1920年代以降の教育者のほとんどは、10～11歳以下の子どもには、観客のために演じる、ということさせない方がよいという見解を持っていると述べている。私も、子どもの気持ちをいわば押し殺させて、または今持っていない感情を無理に引き出して、劇の出来栄を優先させる指導は良くないと感じる。

ところで現実的には「一般劇（脚本発表劇）」を行なって、うまくいく(参加した子どもたちが皆が楽しみ、良い気分になる、また精神的にも成長できる、という意味)ケースも勿論ある。それはひとえに、指導する教師の態度や目的、方法にかかっている。適切な脚本の選択と、配慮のある指導者のもとに行なわれる場合であろう。

結語に代えて

最近の新聞に「暴力に突然走る普通の子ども」という見出しの記事があっ

たが、「突然走る」子どもはいないのではないだろうか。ストレス等を内に溜め込み、あるとき表面化するのである。まわりの大人は、少しでも早く、潜伏する子どもたちのストレスに気づいて受け止め、吐き出させてあげる必要がある。何か事件が起ってしまったからのケアや治療はもちろん大切であるが、Slade（1954）も、予防という点を強調している。「学校で子どものためのドラマを行なうことの最も重要な理由の一つは、実は治癒的な効果ではなく、それ以上に建設的な理由は予防という点だ」というのである。この方法で行なうドラマセラピーは、そのための有効な手段の一つであると考ええる。子どもたちとの即興劇の中で、彼らが短時間のうちに癒されていくのを肌で感じてきたからである。

〈引用文献〉

- R・エムナー 尾上明代訳（2007）『演じることから現実へ ドラマセラピーのプロセス・技法・上演』北大路書房
- McCaslin, N. (1984) *Creative Drama in the Classroom and Beyond*, Longman
- Hartley, Frank, and Goldenson, (1952) *Understanding Children's Play*, Columbia University Press
- Slade, P. (1954) *Child Drama*, Jessica Kingsley

〈参考文献〉

- 尾上明代（2006）心ひらくドラマセラピー，河出書房新社。
- 尾上明代（2002）学校とドラマセラピー，日本演劇学会紀要，(No. 40) pp. 31-46
- Way, B. (1967) *Development Through Drama*, Humanities.